



役割語としての<関西弁>とドイツ語翻訳について
の一考察：『名探偵コナン』を例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 信國, 萌 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017976

◇研究論文◇

役割語としての〈関西弁〉とドイツ語翻訳についての一考察

—『名探偵コナン』を例として—

信 國 萌

◆要旨

小説や漫画といったフィクションにおいて、しばしば関西弁を話すキャラクターが登場することがある。創作物におけるこのような地域変種（いわゆる方言）は、金水（2003）の提唱する「役割語」の一種に相当する。本稿では、日本語原作漫画『名探偵コナン』に見られる役割語としての〈関西弁〉がドイツ語にどのように翻訳されているのかを確認し、その翻訳手法が作中で担う機能を考察する。

調査の結果、『名探偵コナン』における〈関西弁〉は、ドイツ語版においてはドイツ語の特定の地域変種ではなく、どの地域変種にも属さない人工方言（Kunstdialekt）に翻訳されていることが確認された。関西弁に対応する人工方言と標準変種との異なりはもっぱら音節をつづめて発音する（ことを表記上で示す）ことにより示されている。

また、日本語の創作物においてあまり重要でない人物が〈関西弁〉を使う場合、その役割は物語の舞台が関西であることを示すことにある。しかし、ドイツ語版『名探偵コナン』において〈関西弁〉が上述の人工方言に翻訳されているのは、基本的に主要な登場人物に限られる。大阪を舞台としたエピソードにおいて、日本語原文で数多くの名もなき登場人物が〈関西弁〉を使用しているのとは対照的に、ドイツ語翻訳文では、これらの登場人物は〈標準語〉を用いている。このことから、ドイツ語翻訳において日本語の地域変種と置き換えられる人工方言は、特定の地域や、その地域のイメージに紐づいた人物像を想起させる役割語ではなく、主要な登場人物の個性を強調する「キャラクター言語」（金水2015）として用いられていると考えられる。

キーワード：ドイツ語翻訳、関西弁、役割語、人工方言、キャラクター言語

1 はじめに

日本語による漫画や小説といったフィクション作品において、登場人物のセリフはしばしば役割語によって構成されることが知られている。役割語を提唱した金水（2003）によると、その定義は以下の通りである。

- (1) ある特定の言葉遣い（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができる時、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができる時、その言葉遣いを「役割語」と呼ぶ。（金水2003：205）

役割語はステレオタイプに基づいており、必ずしも現実の話し言葉と一致するとは限らない。例えば（2a）と

（2b）を比較すると、読み手は終助詞として「ぜ」を用いる前者を男性のセリフ、「わ」を用いる後者を女性のセリフであると想定する^{（註1）}。

（2a）待ってるぜ。

（2b）待ってるわ。

しかし、現実の男女がこのような終助詞の使い分けをしているとは限らない。とりわけ現代の日本語では、文末表現による性差は縮小傾向にある（山中2008）。実生活でこのような言葉遣いをする場合は、話し手は意識的であれ無意識であれ、聞き手に男性的あるいは女性的な印象を与えることを意図していると考えられる。このように、役割語には使い手に関する特定の人物像を受け手に伝える機能があり、これはとりわけフィクション作品において効果を発揮する。それぞれの役割語が伝える人物像に関する知識は、その言語共同体の多くの話者により共有されている。

役割語が受け手に与える人物像のひとつに出身地域や

居住地域の別がある。金水〔編〕(2014: xi)は現実の方言を色濃く反映した役割語のひとつとして〈大阪弁・関西弁〉を挙げている(以下、〈関西弁〉とする)^(註2)。フィクション作品で登場人物が〈関西弁〉を使うとき、その人物が関西出身であることや、物語の舞台が関西であることを読み手に伝えることが出来る。しかし、日本の中の地域の別は、読者がそもそも日本に馴染みがない場合にはイメージしにくいものがあるだろう。日本語で書かれた作品に関西弁を話す登場人物がいる場合、そのセリフは他言語にどのように翻訳されるのだろうか。

本稿では、日本語原作漫画『名探偵コナン』とそのドイツ語翻訳版を対象に、役割語としての〈関西弁〉がドイツ語にどのように翻訳されているのかを確認する。また、その翻訳手法がドイツ語版の作中で担う機能を考察する。

2 フィクション作品における地域変種と翻訳

2.1 役割語としての地域変種の翻訳

日本語であれドイツ語であれ、自然言語はいくつものいわゆる「方言」にあたる部分的体系を包摂している。社会言語学的な観点でいう「方言」は、地域ごとに異なる言語変種(地域変種/地域方言)と、さまざまな社会集団ごとに異なる言語変種(社会変種/社会方言)に大別される。

フィクション作品において役割語として使用される地域変種は、話し手をその地域変種が用いられる地域の印象と深く結びつける。しかし、その地域の位置、地形、経済状況など、地域の印象を構成する要素は複数あり、翻訳の際に類似のイメージを持つ目標言語の地域変種に置き換えるということは容易ではないだろう。実際に、村上春樹作品における〈関西弁〉の英語翻訳について調査した山木戸(2020)によれば、登場人物が〈関西弁〉を話す複数の作品の英語翻訳において、翻訳者の別を問わず〈標準アメリカ英語〉が用いられている。もっとも、登場人物が〈関西弁〉あるいは非標準変種で話しているという情報そのものは、英語版の読者に伝えられることもある。「伝えられる場合、その情報は地の文で示され、それは原著の地の文にそう書かれていたのがそのまま英語に翻訳されるタイプと、翻訳者の判断によって「関西方言で言う」といった内容が加筆されるタイプに分かれる」(山木戸2020: 38)。

また、ドイツ語とスウェーデン語の文学作品において方言がどのように翻訳されているのかを調査したBrembs(2004)においても、ドイツ語原文のスウェーデン語翻訳、スウェーデン語原文のドイツ語翻訳の双方において、地域変種的な要素は主にそれぞれの標準変種

らしい表現に置き換えられていることが確認されている。ただし、Brembs(2004)で扱われた作品では、地域変種的な要素が全て標準変種らしく翻訳されているわけではない。一部には、地域的な制限を伴わない話し言葉で翻訳されている例がある。

これらの例ではいずれも、原文における地域変種は、翻訳の際に目標言語の特定の地域変種に置き換えられてはいない。ただし、地の文の説明や、地域的な制限を伴わない話し言葉への置き換えなどを通じて、該当する登場人物が地域変種を用いていることを読者に伝えられることがある。このことから、日本語だけではなく他言語においても、登場人物の話す言葉が非標準変種であることは、読者に伝えるべき情報として認識されうるといえる。

それでは翻訳において目標言語で、とりわけ本稿で対象とするドイツ語において、地域変種が用いられることはないのだろうか。

2.2 地域変種とドイツ語翻訳

細川(2011: 153)が指摘するように、ドイツ語圏においては、地域変種は標準変種が普及する過程で「無教養さ」や「古臭さ」を表すものと認識されるようになった。例えばドイツ・コミック『ヴェルナー(Werner)』の初期において、年配の親方と若い見習工では使用言語が異なっている。細川(2011: 153)によれば、親方が北ドイツ訛りを使用し、見習工が標準変種を使用するという言語変種の対比が、「両者の世代および社会層における差異(古臭く田舎っぽい親方vs.あか抜けた都会的な若者)を際立たせているのである」。

翻訳において目標言語で地域変種が用いられる場合にも、原文で示されている社会変種的な差異を、それと同等の含意を持つドイツ語の地域変種の差異で示していることがある。例えばSchreiber(1993: 210)によると、Raymond Queneauの『文体練習(Exercices de style)』のドイツ語翻訳において、庶民のフランス語(franglais populaire)はベルリン方言で翻訳されているのに対し、田舎ことば(Paysan)はバイエルン方言で翻訳されている^(註3)。Brembs(2004: 68-70)によれば、ドイツ語では地域変種の間にも威信の高低という序列が存在している。この序列は調査によって矛盾することもあり、絶対的な上下関係を示すものではないが、地域変種がその地域の文化的な印象や、肯定的あるいは否定的な評価と一定の結びつきを持つことは確かである。

なお、ある言語において様々な地域変種がその土地の文化的な印象や評価と結びついていることは、翻訳の際に原文の地域変種と同種の印象を持つ地域変種との置き換えを容易にするとはいえない。Geissberger(2016: 27)はむしろ、原文の地域変種と同じ文化的連想を呼

び起こす類似の言語変種を目標言語の中に見つけるのは容易ではないことに注意すべきであると指摘している^(註4)。そのような翻訳手法は最悪の場合、読者の信用を失いかねないというのである。

2.3 漫画のドイツ語翻訳における人工方言

地域変種に限らず、日本語原文で用いられている役割語をドイツ語に翻訳する際に、とりわけ漫画という媒体において人工方言(Kunstdialekt)を用いた翻訳手法がとられうることを細川(2011)が指摘している。細川(2011:160)によれば人工方言とは「翻訳に際して、特定のコンテキスト(「田舎者らしさ」「黒人らしさ」など)を伝達するために、複数の言語変種を合成して新たに造られた言語変種」のことであり、具体例の一つとして(3)のような浮浪者のセリフが挙げられている。

(3) “Tach zusammen, Leute! [...] Ich will auch gar nich lange stören, gell?”

(細川2011:160)^(註5)

(拙訳: こんにちは、皆さん! [...] 長々とお邪魔する気はありません。わかるでしょう?)

ここでは、北ドイツ訛りの表現(Tach:「こんにちは」を意味するGuten TagのTagに相当)と南ドイツ訛りの表現(„... gell?: 相手の同意を誘う表現 „... nicht wahr?“に相当)が混用されている。それにより、特定の地域と結びついた言語変種ではなく、「無教養らしさ」や「田舎者らしさ」を表現する新たな人工方言が形成されているのである。

また細川(2011)はバルツァー(2004)の論を踏まえ、ドイツの若い読者層は漫画のドイツ語がなるべくオリジナルに近いことを期待しており、時にはドイツ語としては不自然な統語構造にしてまで、人工方言を用いた翻訳がなされるという。例えば(4)では、日本語の役割語である<侍ことば>を翻訳する際に、日本語の敬称「殿」が借用されている。さらに、ドイツ語では本来敬称は固有名詞の前に置くが(Herr Müller「ミュラーさん」など)、敬称を固有名詞の後ろに置くことで、日本語らしさを維持した翻訳がなされている。このような人工方言を用いた翻訳手法により、<侍ことば>という日本語の役割語に表現される「侍らしさ」が、ドイツ語翻訳文においても表現されているのである。

(4) “Kanemaki Jisai-Dono, nicht wahr?” (鐘巻自斎殿ですな?) (細川2011:164)

細川(2011:161)の論をまとめると、起点言語において役割語として用いられている言語変種の訳語に人工方言を当てた場合、それは目標言語における役割語として機能するはずである。とりわけ漫画内の役割語の翻訳においては、起点言語の言語変種が明確に「特定の人物像」と共に使用されていることや、言語使用者を表す図

表によって人工方言の機能を補完できるという利点からも、人工方言が目標言語内の役割語とみなせることが期待できるという。

それでは日本語原文の漫画作品がドイツ語に翻訳される場合、役割語としての地域変種はどのように翻訳されるのだろうか。細川(2011)に鑑みると、読者層の若い漫画という媒体においては、日本語の地域変種の別がドイツ語翻訳にも何らかの形で反映されることが予想される。また、それはドイツ語の特定の地域変種との置き換えではなく、人工方言の創造によるのではないだろうか。

次章では、ケーススタディとして日本語原作漫画『名探偵コナン』を取り上げ、役割語としての<関西弁>がドイツ語ではどのように翻訳されるかを調査する。

3 調査対象

3.1 日独版の漫画『名探偵コナン』

本稿で調査対象とする『名探偵コナン』は青山剛昌原作による日本の人気推理漫画シリーズである。1994年に連載が開始され、2022年現在でも連載が続いている。TVアニメやアニメ映画、ゲームなど様々なメディアミックスによる作品展開があるが、本稿では原作漫画のみを調査の対象とする。漫画『名探偵コナン』は“Detektiv Conan”(探偵コナン)というタイトルでドイツ語にも翻訳されており、ドイツ語圏でも人気を博している。2001年に発行された第1巻より一貫して、翻訳者はJosef ShanelおよびMatthias Wissnetの2名である。2012年に行われたShanel氏のインタビューによると、翻訳作業の大部分はShanel氏が担っているようである。

(5) コナン翻訳の手順は次の通りです。日本語の本を受け取り、締め切りを知らされます。それから時間配分を決めて作業に取り掛かります。まずは細かいことにこだわらずに、ざっと翻訳します。その後、全ての細かい点を整える校正に入ります。次に同僚のマティアス・ヴィスネットが校正に入り、さらに1, 2点議論して、さらなる問題が見つければ二人で修正することで、脚本が出来上がります。その後、編集部へ送られ、もう一度編集された後、活字になります。

(「独占インタビュー『名探偵コナン』の翻訳者ヨーゼフ・シャネルに聞く!」より拙訳)^(註6)

3.2 日本語原作『名探偵コナン』における<関西弁>

この漫画にはしばしば<関西弁>を話すキャラクターが登場する。代表的なのは主人公のライバル「服部平次」である。彼は大阪生まれの大阪育ちという設定で、<標準語>を話す主人公「工藤新一」と様々な点で対比

される存在である。なお、服部平次の言葉遣いが〈関西弁〉であることは作中人物にも認識されており、初登場時には作中人物から「変な関西弁の男」と言われている(青山1996a:27)^(註7)。

ところで金水(2014:xi)によれば、〈関西弁〉は「ポピュラーカルチャーの歴史の中でも古くから用いられてきた、伝統ある役割語の一つ」である。物語の中で〈関西弁〉を話す人物がいたら、以下の特徴のどれか一つ、あるいは二つ以上の特徴を持っていると考えると考えてはば間違いないとされている。

(6)

- 1 冗談好き、笑わせ好き、おしゃべり好き
- 2 けち、守銭奴、拝金主義者
- 3 食通、食いしん坊
- 4 派手好き
- 5 好色、下品
- 6 ど根性(逆境に強く、エネルギーにそれを乗り越えていく)
- 7 やくざ、暴力団、怖い 金水(2003:82-83)

しかし金水(2003:100-101)によれば、「服部平次」というキャラクターはこの原則からは逸脱している。つまり「お金に執着するわけでもなく、食いしん坊でもなく、好色でもない」のであり、〈関西弁〉を話すという点を除くと「これとって特徴がない」。服部平次が没個性的なキャラクターであるわけではなく「主人公に対抗する強力なライバルとしてかっこよく描かれて」おり、金水(2003:99)によれば近年の若者の間では「関西弁=かっこいい」という図式もできあがりつつあるという。

とはいえ、このような新しいステレオタイプは、少なくとも今はまだ(6)が示す伝統的なステレオタイプのように広く浸透しているとはいえないだろう。服部平次の「かっこいい」という人物像は必ずしも〈関西弁〉に直接的に結びつけられるものではなく、むしろ「〈関西弁〉を話しているがこれまでの伝統的なキャラクターとは異なりかっこいい」という点が彼の特徴であるとみなすこともできる。このことから本稿では『名探偵コナン』で服部平次が用いる〈関西弁〉を、登場人物の内面に関するステレオタイプを与えるのではなく、「関西出身者である」という地域的な結びつきのみを与える機能を持っていると捉える。〈関西弁〉が表す「関西出身者である」という特徴は、日本の地理に馴染みのないドイツ語圏の読者にとっては想像しにくいであろう。この〈関西弁〉がドイツ語にどのように翻訳されており、ドイツ語圏の読者にはどのような特徴を想起させる機能を持っているのかを調査する。

なお、『名探偵コナン』で服部平次が用いる〈関西弁〉は、先述の通り伝統的な役割語としての〈関西弁〉

の機能を果たしているとはいいたくない。すなわち、服部平次が話す〈関西弁〉は彼に「地域」に関する特定の人物像を与えているものの、「性格」に関しては(6)に挙げたような特定の人物像を与えてはいない。この点において、服部平次が用いる〈関西弁〉は役割語としての〈関西弁〉の代表的な使用例ではない。しかしながら本稿が行うケーススタディの調査対象としては、日本語漫画原文における〈関西弁〉が登場人物に想起させる人物像は多層的でないほうが望ましい。ドイツ語翻訳文において〈関西弁〉のセリフが非標準変種に翻訳されている(あるいはされていない)場合、翻訳者が〈関西弁〉の持つどの要素を訳文に反映させる(あるいはさせない)意図であるかが明白になるためである。本稿では、役割語としての〈関西弁〉と登場人物の地理的なイメージの関係に着目して調査を行う。〈関西弁〉と登場人物の内面的なイメージが紐づけられている際にそれがドイツ語にどのように翻訳されるのかという問題は扱わない。

本稿では『名探偵コナン』10, 12, 13, 19巻を調査対象とする。『名探偵コナン』は2022年10月時点で日本語原作版が102巻、ドイツ語翻訳版が100巻まで発行されている。本稿で主に取り上げるのは、服部平次が初登場するエピソード(10巻)、再登場するエピソード(12~13巻)、大阪が舞台となるエピソード(19巻)である。

4 分析

4.1 服部平次の〈関西弁〉ドイツ語翻訳の特徴

ドイツ語版『名探偵コナン』で服部平次が話しているドイツ語は、他の多くの登場人物が話す標準的なドイツ語とは明らかに異なっている。具体的には、「音節をつづめて発音する」ことを表記上で表しているという点の特徴的である。

2015年に行われた翻訳者Shanel氏へのインタビューによると、この表記法は翻訳者が創造したものであり、特定の地域変種を用いているのではない。

(7) 日本語では、関西弁はポップカルチャーの文体として確固たる地位を築いています。しかし、それをドイツ語に置き換えるのはいつも手間のかかることであり、正直に言うと、あまり楽しい作業ではありません。きわめてつまらない方法ですが、ドイツ語では平次は方言を使わず、発言全体において少し音節をつづめているだけなのです。例えば「Biste bescheuert?」(頭がおかしいのか?)、「Das isses!」(それだ!)、「So hab ich's aber nich' gemeint」(そんなつもりで言ったんじゃない)など。

(「独占インタビュー第2弾『名探偵コナン』の翻訳者ヨーゼフ・シャネルに聞く!」より拙訳)^(註8)

ドイツ語版『名探偵コナン』で実例を観察すると、Shanel氏が<大阪弁>のセリフを翻訳する際に用いている表記法の特徴は、人称代名詞の取り込み (4.1.1)、語末のtの省略 (4.1.2)、不定冠詞の語頭eiの省略 (4.1.3)に分けられる。(7)でShanel氏本人に挙げられている3例のうち「Biste bescheuert?」は人称代名詞の取り込みに、「So hab ich's aber nich' gemeint」は語末のtの省略に相当する。「Das isses!」は人称代名詞と語末のtの省略が同時に起きている例である。不定冠詞の語頭eiの省略は(7)で挙げられている例には見られない。

以下、実例とともに観察結果の詳細を概観する。

4.1.1 人称代名詞の取り込み

ドイツ語による服部平次のセリフにはしばしば(8)のように、本来別々の語として分けて書くべき二語が一語にまとめられているという現象が見られる。

(8) "Ich verlange, dassde sofort Shinichi Kudo herrschafft!!" (工藤新一をはよ出さんか!!)

(Aoyama 2003a : 26) (註⁹)

(8)では標準的なドイツ語ではdass duとなるべきところを一語にまとめ、さらに語末のuがeに置き換えられている(註¹⁰)。ドイツ語の会話で速く話す場合には、母音が質的にも量的にも簡素化され、あいまい母音[ə]に近づく母音弱化という現象がよく見られる(新倉2013: 106)。ドイツ語ではあいまい母音[ə]は母音字eで表されるため、(8)はduのu[u:]があいまい母音[ə]の発音になるという音韻変化の現象を表記上で表していると言える。

二語を一語にまとめるという表記方法は、(9)(10)のように動詞の後に人称代名詞du(きみは)やSie(あなた/あなたがたは)が続く場合に多く見られる。

(9) "Na siehste!" (そやろ?)

(Aoyama 2003a : 34)

(10) "Aber lassense mich alles in Ruhe demonstrieren!!" (今、その証拠を見せたる!!)

(Aoyama 2003a : 62)

(9)では、標準的なドイツ語ではsiehst duとなるべきところを一語にまとめ、(8)と同じく語末のuをeに置き換えている。さらに、二語目の語頭のdが省略されている。ドイツ語の発音では、無声子音の直後が有声子音であれば、その子音は無声化する(新倉2013: 101)。(9)に見られる子音字dの省略は、siehst du [zi:st du:]を発音する際、siehstの語末の無声子音t [t]の後に続くduの語頭の有声子音d [d]が無声音に同化するという音韻変化を表記上で表していると言える。(7)で翻訳者Shanel氏が例として挙げている「Biste bescheuert?」でも同様の現象が確認できる。すなわち、標準的なドイツ語ではBist duとなるべきところを一語にまとめ、語

末のuをeに置き換え、さらに二語目の語頭のdを省略している。

(10)では、標準的なドイツ語ではlassen Sieとなるべきところを一語にまとめ、語末のieがeに置き換えられている。これも、ieという文字で表される母音の発音[i:]が[ə]に近づいていくという母音弱化を表記上で表していると言える。

4.1.2 語末のtの省略

服部平次の<関西弁>のドイツ語翻訳には、(7)の「So hab ich's aber nich' gemeint」や(11)(12)のように、nichtおよびistの語末のtの表記が省略され、代わりにアポストロフィを書くという表記法も見られる。

(11) "Es gibt nur eine Erklärung, warum er nich' fragt..." (それを聞かん理由はただ一つ...)

(Aoyama 2003a : 28)

(12) "Sie is' zu perfekt, und das macht Sie stutzig!" (完璧すぎるから気に入らんのや...)

(Aoyama 2003a : 33)

これは、子音字tが表す破裂音[t]を破裂させずに発音するという無開放閉鎖音(内破音)に対応するように思われる。ドイツ語の無開放閉鎖音は、(13)のように子音に挟まれた子音に起こるとされている。また、無開放閉鎖音は、会話の速度が速まると、完全に脱落して発音されないこともある。

(13) Wie findest du das? [fɪndəst' du:] (君はどう思いますか?)

(新倉2013: 105)

(11)(12)に見られる語末のtの省略とアポストロフィの挿入はこのような音の脱落を表記に反映させていると言える。つまり、(11)のnichtの語末の子音t [t]は直前の子音ch [ç]と直後の子音f [f]に、(12)のistのt [t]は直前の子音s [s]と直後の子音z [ts]に囲まれており、会話の際には容易に脱落しうるのである。

ただし、『名探偵コナン』のドイツ語翻訳版において、<関西弁>の翻訳として用いられている語末のtの省略が適用される単語は、nichtとistに限定されている。例えば、(12)のmachtの語末の子音t [t]も子音ch [x]と子音s [z]に囲まれており、発音上は脱落しうるが、このようなtが省略されてアポストロフィに置き換えられる例は見られない。また、nichtとistであれば、直後の単語が母音で始まっている、あるいはnichtやistが文末に置かれており、[t]が子音に囲まれていない場合でもtを省略してアポストロフィを挿入している。このことから、翻訳者は現実の話言葉的な発音を意識しているのではなく、<関西弁>の翻訳であることを表現するために、特別にnichtとistのtを省略して表記しているのだと考えられる。

なお、人称代名詞の取り込みと語末のtの省略が同時

に行われている例も見られる。

(14) “Wenn du Recht haben solltest, wie isses dann dem Täter gelungen, aus dem Zimmer zu gelangen?!” (ほんなら犯人はどーやってこの書斎から脱出したっちゅうんや!?) (Aoyama 2003a : 82)

(14) の isses は標準的なドイツ語では ist es となるべきところを一語にまとめられている。さらにその際に、ist の語末の t が省略されている。この2点をそのまま表記すると ises となるはずであるが、(14) では s が追加され isses と表記されている。これは、子音 s の直後に母音があると s が有声音 [z] で発音されるというドイツ語の発音規則があるためだと思われる。ist の語末の破裂音 t [t] が無開放閉鎖音となる、ないし脱落した後に母音が続いているということを読者に伝えるためには、s が本来の ist の発音の通り無声音 [s] で発音されていると読者に認識される綴りで書く必要がある。無声音 [s] に対応する ss という表記を実現するために、s が追加されているのである。なお、(7) で翻訳者 Shanel 氏が例として挙げている「Das isses!」でも同様の現象が確認できる。

4.1.3 不定冠詞の語頭の ei の省略

ドイツ語版『名探偵コナン』の服部平次のセリフではさらに、(15) (16) のような表現も見られる。これは、格変化語尾の種類を問わず不定冠詞の語頭の ei を省略し、代わりにアポストロフィを書くというものである。

(15) “Genau wie Kudo bin ich n Oberschülerdetektiv!” (工藤と同じ高校生探偵や!!!) (Aoyama 2003a : 30)

(16) “Es handelt sich um nen Mord in nem verriegelten Raum!!!” (密室殺人っちゅう事や!!!) (Aoyama 2003a : 50)

(15) (16) の n, nen, nem は、標準的なドイツ語では ein, einen, einem と表記すべき単語である。ドイツ語の話し言葉では、不定冠詞の語幹 ein [aɪn] の最初の二重母音 ei [aɪ] が脱落することがある^(註11)。n, nen, nem という表記は、このような音の脱落という音韻変化を表していると言える。

ただし話し言葉では、不定冠詞の語頭の ei だけではなく、格変化語尾のあいまい母音 e [ə] が脱落することもある。しかし、ドイツ語版の服部平次のセリフで、(16') のように格変化語尾の e を省略する表記は見られない。このことから、不定冠詞の語頭音 ei の省略も 4.1.2 の語末の t の省略と同様に、現実の話し言葉的な発音を表記上で示そうとしているのではなく、<関西弁>を示す手段として規則的に使用されているのだと思われる。

(16') Es handelt sich um ein'n Mord in ein'm verriegelten Raum!!!

4.1.4 ドイツ語における日常語としての表記法

4.1.1から4.1.3に挙げた音節をつづめて発音していることを示す表記法の大半は、翻訳者の Shanel 氏が一から創造したものではない。その多くは小説の会話文や、最近では SNS の私的な投稿文などにも見られることがあり、一部には辞書に載っている表現もある。例えば、Duden のオンライン辞典には isses という項目があり、umgangssprachlich (日常語の、口語的な) 場面で使用されるとしている^(註12)。

『名探偵コナン』のドイツ語翻訳においては、登場人物が日常的な場面で話しているのか、改まった場面で話しているのかといったことは無関係に、服部平次の話す<関西弁>の翻訳としてこれらの表記法が規則的かつ一律に使用されている点が創造的である。

4.2 地域変種か人工方言か

前節では、『名探偵コナン』における<関西弁>のドイツ語翻訳には、「音節をつづめて発音する」ことを表記上で示すという特徴を持った言語変種が当てられていることを確認した。翻訳者 Shanel 氏によれば、この言語変種はドイツ語のどの特定の地域変種でもない。(7) で言及されているように、「ドイツ語では平次は方言を使わず」にいる。また (7) に続けて Shanel 氏は自身の翻訳を次のように説明している。

(17) これは好ましい妥協です。バイエルン方言やケルン方言のような本物の方言は、ドイツ語の文の中に入れてしまうと、異なる効果を与えてしまい、不適切でしょうから。

(「独占インタビュー第2弾『名探偵コナン』の翻訳者ヨーゼフ・シャネルに聞く!」より拙訳)

日本語原文の<関西弁>という地域変種をドイツ語に翻訳するのにあたり、Shanel 氏は意図的にドイツ語の特定の地域変種への置き換えを避けているようである。その理由として、ドイツ語の地域変種を日本語の地域変種の訳語に当てても、ドイツ語の地域変種によって与える効果が、日本語のそれと同じにはならないということを挙げている。

もっとも、翻訳者がドイツ語の特定の地域変種を意図していなくても、読者には特定の地域変種として受け取られるという可能性もある。そこで、ドイツ語版『名探偵コナン』の服部平次のセリフ (18) (19) (20) を取り出し、ドイツ語母語話者3名にどの地方の方言だと思いか質問した。なお、回答者は3人ともドイツ北部ハンブルクの出身である。また、質問にあたって3つのセリフが同一人物のものであることは伝えておらず、対応する日本語原文も示していない。

(18) “He! Was hamse vor, Mann?!” (おい、おっさん何しとんのや!?) (Aoyama 2003b : 33)

(19) “Nimm mich nich’ auf’n Arm!” (アホぬかせ！)
(Aoyama 2003c : 21)

(20) “Daste mich anlügst, is’ doch sonnenklar, Mäd-
del!” (ウソゆうたらアカンで、ねーちゃん！)
(Aoyama 2003a : 25)

(18) の hamse は標準的なドイツ語では haben Sie であり、人称代名詞 Sie が動詞に取り込まれて一語になっている。この文について、3名中2名が「どこの方言かわからない (keine Ahnung)」と答え、1名がベルリンと答えた。この文は、ドイツ語話者に共通して同じ地域変種であるとは判断されにくいようである。

一方、(19) に関しては3人の回答者全員が北部の方言であると回答した。これは、語末の t の省略である nich’ が北部方言であると判断されたためではないかと思われる。ドイツ語の nicht の発音は地域変種により異なっており、北部では ch を含み (nich, nicht)、南部では ch を含まない (nit, net) という点で大別される^(註13)。

さらに (20) に関しては、3人の回答者全員が南部の方言であると回答した。これは、Mädel が一般に南部方言として知られているためだろう。なお、ドイツ語版『名探偵コナン』の<関西弁>の翻訳において、Mädel のように特定の地域変種で用いられると知られている語が使用されていることは珍しい。ただし、Mädel は方言ではなく Umgangssprache (日常語) に属するとみなされることもあり^(註14)、翻訳者 Shanel 氏がこの語を地域変種らしい語とみなして翻訳文に使用しているかどうかは定かではない。

以上は非常に小規模な試験的調査にすぎないが、ドイツ語版の服部平次のセリフは常に特定の地域変種を読み手に想起させるものではないと言えるだろう。ドイツ語版で<関西弁>の翻訳として用いられている言語変種は、翻訳者が特定の地域変種を想定させないよう意図して創造した人工方言であり、おおむねその意図の通りに読者に読みとられていると考えられる。

4.3 役割語かキャラクター言語か

『名探偵コナン』には、服部平次以外にも<関西弁>を話すキャラクターが登場することがある。大阪が舞台となる19巻のエピソードでは、登場人物の多くが<関西弁>を話しており、主人公たち<標準語>を話す登場人物の方が少数派になる。

しかしながら、主人公のライバルである服部平次とは異なり、物語上それほど重要度が高くない人物の<関西弁>のセリフは、ドイツ語では<標準語>で翻訳されている。例えば (21) は服部平次のセリフ、(22) はそれに続く事件の目撃者のセリフである。

(21) “Ja. Jemand rief ihn an und sagte ihm, dass
aufm Dach ’n komischer Mann sei. Daraufhin isser

dann nachsehen gegangen.” (ああ…このおっちゃん、誰かに電話で「屋上に変な男がおる」ゆわれて上がっただけやて…)

(22) “Ich habe ein kleines Café im ersten Stock des Gebäudes, verstehen Sie?” (ワシ、このビルの二階で茶店やっとなる者ですんねん…)

(Aoyama 2003d : 98)

(21) の服部平次のセリフには、これまでの<関西弁>の翻訳に見られていたものと同様の人工方言が用いられている。’n は不定冠詞 ein の語頭の ei の省略である。isser は標準的なドイツ語では ist er と表記すべきところを、ist の語末の t を省略したうえで次の人称代名詞 er を取り込み一語にしている。

(22) の事件の目撃者のセリフにも不定冠詞 ein が含まれているが、こちらでは語頭の ei が省略されていない。また、文末の verstehen Sie も (10) の lassense (lassen Sie) のように一語にして verstehense と表記することができそうだが、そうはなっていない。

<関西弁>が人工方言を用いて翻訳されていないのは、名前のあるキャラクターも同様である。例えば (23) は、服部平次の父親であり、これ以降のエピソードにも時折登場する服部平蔵のセリフである。文頭の haben Sie は (18) と同じく hamse と表記することもできそうだが、標準的な表記のままになっている。

(23) “Haben Sie dieses doch sehr merkwürdige
Detail an die Presse weitergegeben?” (その事マス
コミには流したんか?) (Aoyama 2003d : 79)

このエピソードで服部平次と並んで<関西弁>のドイツ語翻訳に人工方言が用いられているのは、彼の幼馴染である遠山和葉のみである。(24) は遠山和葉のセリフ、(25) はそれに続く服部平次のセリフである。どちらにも下線部に見られるような人工方言が用いられている。

(24) “Und wieso lädste dann nich’ auch diesen
Kudo ein?” (ほんならなんでその「工藤君」ここに
呼ばへんのん?)^(註15)

(25) “Was denn? Kudo is’ doch…” (アホ！工藤なら
ちゃんと……) (Aoyama 2003d : 90)

遠山和葉は後に主人公の幼馴染である毛利蘭の友人にもなる、この漫画の主要人物の一人である。服部平次が様々な点で主人公の工藤新一と対比されるように、遠山和葉もまた毛利蘭と対比される人物であり、そのために服部平次と同じ言葉遣いをさせているのだと思われる。

金水 (2015 : 10) によれば「方言を役割語として用いる場合は、その場面が特定の地方であることを示したり、その話者が、その方言によって示される地方の人物のステレオタイプを持っていることを表すかのどちらかが典型である」。『名探偵コナン』の大阪が舞台となっているエピソードにおいて、関西出身と思しきキャラク

ターが主要人物から端役までそろって〈関西弁〉を話しているのは、読者に「その場面が特定の地方であることを示す」という意図があるためだろう。一方、ドイツ語翻訳版では、〈関西弁〉に対応させた人工方言を用いたセリフが当てられているのは主人公との関係性が重要になる主要登場人物のみである。ドイツ語の当該の人工方言は、作品中で場面が関西であることを示す機能は担っていない。『名探偵コナン』のドイツ語翻訳における〈関西弁〉に対応する人工方言は、特定の地方と登場人物を結びつける「役割語」として働いているとは言い難い。この言葉遣いは、主人公のライバルとしての個性を強調するために用いられていると考えられる。つまり、主人公の工藤新一やそのパートナーの毛利蘭が〈標準語〉を話すことに対して、ライバルの服部平次やそのパートナーの遠山和葉はいわば〈非標準語〉を話しているという点で特徴づけられているのである。

このようにキャラクターを個別に特徴づける機能は、役割語ではなく「キャラクター言語」のものであると捉えられる。キャラクター言語とは、特定のキャラクター限定の話し方ではあるが、ステレオタイプではなくキャラクターの個性を表すために用いられる話し方である。金水（2015：7-8）はキャラクター言語の代表的なパターンとして以下の4種類を挙げている。

(26)

- a. 特定の社会的・文化的グループとの結びつきが認められるが、未だ言語共同体の中で「役割語」として広く認知されているとは言いがたい話し方。
- b. 既に存在する役割語の用法をずらして、本来の社会的・文化的グループには属さないキャラクターに適用されている話し方。
- c. 役割語の一種とも見られるが、当該の社会的・文化的グループのステレオタイプの表現というよりは、話し手の個性の表現として用いられている話し方。
- d. いかなる社会的・文化的グループにも対応しないが、キャラクターの物語上の役割から割り当てられた特殊な話し方。（金水2015：7-8）

『名探偵コナン』のドイツ語版で日本語原文の〈関西弁〉に対応するように創造された人工方言は、aのパターンにあたると思われる。彼らの話し方は作中でもKansai-Dialekt（関西弁）あるいはOsaka-Dialekt（大阪弁）と明言されているため、読者に特定の地域との結びつきを感じさせないとは言えない。しかし、少なくとも今回観察対象とした19巻までの時点では、翻訳作品の読者の中という限られた言語共同体内に限っても「役割語」と言えるまで広く認知されていないために、特定の登場人物以外のセリフの翻訳には用いられていないの

だろう。日本語原文の〈関西弁〉は漫画の読者のみならず、広く日本語共同体の中で、関西という特定の地域を想起させる役割語としての地位を確立している。この点において、日本語原文の〈関西弁〉と、それに対応するドイツ語翻訳の人工方言の〈関西弁〉は大きく異なっている^(註16)。

5 おわりに

本稿では、日本語原作漫画『名探偵コナン』とそのドイツ語版を比較して、日本語原文で役割語として用いられている〈関西弁〉がドイツ語ではどのように翻訳されているのかを調査し、その翻訳手法が作中で担っている機能を考察した。

調査の結果、この漫画で用いられる〈関西弁〉は、ドイツ語ではドイツ語圏の特定の地域と結びつく具体的な地域変種を用いて翻訳されているのではなく、翻訳者が創造した人工方言を用いて翻訳されていることが確認された。この人工方言は、〈標準語〉を一部制限した形で表されている。具体的には「音節をつづめて発音する」という音声的な特徴を表記上で明示しているのである。

この人工方言は日本語原文の〈関西弁〉と常に置き換えられるわけではなく、基本的に主要な登場人物の翻訳のみで用いられる。このことから、この人工方言は特定の地域と登場人物を結びつけるのではなく、あくまでも重要な登場人物の特徴づけとしての性格が強いと考えられる。さらにこのことから、当該の人工方言は日本語の〈関西弁〉とは異なり、言語共同体で広く共有されている特定の人物像を想起させる「役割語」とまでは言えず、主要な登場人物を特徴づけるための「キャラクター言語」として働いていると考えられる。

なお、この人工方言は確かに作中の全ての関西出身の登場人物に当てられるわけではないが、「関西弁を話している」と明言されるキャラクターは、物語の主要人物ではなくても、この話し方で翻訳されることがある。以下の(27)(28)(29)は、爆発事件を目撃した主人公の工藤新一（毒薬により小学生の姿になり「江戸川コナン」を名乗っている）と警察の会話である。

(27) “Es war ein Hüne von einem Mann, gut über zwei Meter groß! Vermutlich stammte er aus der Kansai-Region...” (2mを越す大きなおじさんだよ！ たぶん関西の人なんじゃないかなー・・・)

(28) “Warum aus der Kansai-Region...?” (関西というのは・・・)

(29) “Na ja, weil er, bevor er bei der Explosion umkam, auf der Toilette sagte... “Was soll der Mist? Geht ja gar nich’ auf...?!” “Hä? Is’ ja offen?”” (そのおじさんが爆発で死ぬ前にトイレの中でいったた

んだよ…「なんやコレ入れへんぞ… ん？ あいとるんか？」ってね！)

(Aoyama 2003b : 80)

江戸川コナンが発言を引用している爆発事件の被害者は、敵役 of 犯罪組織に属する人間ではあるが、このエピソードで初登場し、被害者になって退場しただけの脇役である。しかし、彼のセリフは〈関西弁〉に対応する人工方言で翻訳されている。このことから、ドイツ語圏の読者にとってもこの話し方がKansaiという地名と強く結びついて、少なくとも漫画の読者という狭い言語共同体の中では、日本の特定の地域Kansai出身者の話し方であるという共通認識が出来上がり、ドイツ語における「役割語」として用いられるようになる可能性もあるといえるだろう。細川 (2011 : 167) によれば、ドイツ製のコミック・メディア内においてはすでに、役割語として普及した人工方言の例として〈黒人ことば〉があることが確認されている^(註17)。Shanel氏が創造した人工方言もまた、ドイツ語翻訳版『名探偵コナン』における〈関西弁〉という役割語として定着する可能性がある。

この人工方言が「役割語」の地位を確立すれば、より繊細な翻訳が可能になるだろう。例えば、13巻には〈大阪弁〉に不慣れな江戸川コナンが服部平次のふりをして〈大阪弁〉を話すというエピソードがある。この話では、コナンがおぼつかない〈関西弁〉を使い、入れ替わりに気づいていない登場人物から、(30)のように文句を言われる。話し方が変わったことで、相手に不信感を与えているのである。

(30) 「なめんなよ、急に变な関西弁使いやがって!!」
(青山1996c : 8)

(31) “Der soll sich hier nicht so aufspielen, das Kansai-Landei!” (拙訳：そんなに威張るな、関西の田舎者が!)
(Aoyama 2003c : 8)

しかしドイツ語翻訳版では、それまで〈大阪弁〉に対応して用いられていた人工方言が、特に形を変えることなくそのまま使われている。これはそもそも、この人工方言が読者間で「役割語」としての地位を確立しておらず、どのような規則で表記されるものかについても読者の中で共通認識がないためであろう。ドイツ語版では、服部平次の話し方が(話し手が江戸川コナンに変わっているせいで)明確にこれまでと異なっているという設定が表現されなくなったことに合わせてか、(30)のセリフが(31)のように翻訳されている。(31)のセリフは幾分差別的な響きになっており、発言している登場人物の人物像が日本語から受ける印象と異なってしまう可能性がある。翻訳において、目標言語の翻訳者が起点言語の「役割語」を訳すために人工方言を創造したとき、それが目標言語内においても「役割語」としての地位を得るようになれば、翻訳の仕方にも影響しうるのである。

先述の通り『名探偵コナン』は2022年10月までにすでに100巻を超える長編シリーズとなっている。巻数を重ねることにより、日本語原文における〈関西弁〉のドイツ語訳の手法やその機能に変化が見られるかどうか、今後の調査で確認したい。

注

1. 終助詞「わ」には上昇調のものと下降調のものがあり、女性的と判断されるのは上昇調の「わ」だけである。金水 (2003 : 134-135) によれば、下降調の「わ」はどちらかというとも男性的であり、また各地の方言に現れる「わ」はたいてい下降調で、性別に関しては中立的であることが多い。
2. 金水 (2014) に倣い、本稿では役割語のラベルを山括弧に入れて示す。役割語としての〈関西弁〉は現実で関西の人々に話される地域変種としての関西弁とは必ずしも一致しないこともあるが、その差異について本稿では言及しない。
3. ドイツの首都はベルリンであるが、ベルリン方言もまた地域変種の一つであり、ドイツ語の標準変種ではないという点には注意が必要である。
4. ドイツのハンブルクから大阪に留学しているドイツ語を母語とする学生1名に「大阪はドイツのどの地域に似ているか?」と質問したところ、「海が身近にある点では北ドイツに似ているし、夏の暑さは南ドイツに似ているように思う」との回答を得た。異なる言語文化圏の一地域を比べて、それぞれの地域と結びつく文化的連想が一致するという組み合わせを見つけることは、一人の人間の中ですら容易ではない。このことから、原文の地域変種と同じ文化的連想を呼び起こす類似の言語変種を、多くの読者に納得されるかたちで目標言語の中に見つけることの難しさがうかがえる。

5. この例はディズニーの『愉快なポケットブック』のドイツ語翻訳であり、日本語原作漫画の翻訳ではない点に注意されたい。また、例文内のnichはnichtの地域変種であると考えられるが、細川 (2011 : 160-161) の分析では言及されていない。なお、細川 (2011 : 160) には「おばんです、皆さん! [...] 長居はしまへんさかいに!」という〈関西弁〉らしい日本語訳が当てられているが、本稿の研究対象とする「日本語の〈関西弁〉からのドイツ語翻訳」の例と混同しかねないため、ここでは標準的な日本語訳と差し替えている。
6. “Exklusiv: Interview mit Detektiv Conan-Übersetzer Josef Shanel!”, <https://conannews.org/exklusiv-interview-mit-detektiv-conan-ubersetzer-josef-shanel/13604/> (Kevin D. 執筆, 2012年10月9日公開) (最終閲覧日 : 2022年10月24日)
7. 「変な」は「関西弁の」ではなく「(関西弁の) 男」を修飾しているものと思われる。また、当該箇所はドイツ語版では“ein komischer Vogel mit Osaka-Dialekt wie du” (君のような大阪弁の変なやつ) と翻訳されている (Aoyama 2003a : 27)。
8. “Exklusiv: Zweites Interview mit Detektiv Conan-Übersetzer Josef Shanel!”, <https://conannews.org/exklusiv-zweites-interview-mit-detektiv-conan-uebersetzer-josef-shanel/23148/> (Kevin D. 執筆, 2015年1月1日公開) (最終閲覧日 : 2022年10月24日) なお、「So hab ich's aber nich' gemeint」のhabはhabeの語末のeの省略、ich'sはich esの短縮形である。これらの省略や短

- 縮は標準的なドイツ語でもよく見られるため、＜関西弁＞の翻訳のための特別な表記であるとみなさない。
9. 例文 (8) 以降、ドイツ語版『名探偵コナン』からの引用文に加えた下線は筆者による。また、日本語訳は日本語原作の対応箇所を使用している。
 10. dass du は後述の (20) に見られるように、dassde ではなく daste と表記されていることもある。
 11. 「文字と発音の基礎 05. 話し言葉における発音の変化」, <https://vu.flare.hiroshima-u.ac.jp/german/hatsuon/05veraenderung.htm> (最終閲覧日: 2022年10月24日)
 12. <https://www.duden.de/rechtschreibung/isses> (最終閲覧日: 2022年10月28日)
 13. “Atlas zur deutschen Alltagssprache”, <https://www.atlas-alltagssprache.de/runde-2/f25e/> (最終閲覧日: 2022年10月24日)
 14. 例えばDudenのオンライン辞典によると、Mädelの使用領域はumgangssprachlich, häufiger auch ironisch (日常語で、しばしば皮肉的に) とされている。<https://www.duden.de/rechtschreibung/Maedel> (最終閲覧日: 2022年10月25日)。またWöllstein & Dudenredaktion (2016: 232) によれば、Mädelの複数形にはいくつかの変種があり、一般的にはMädelだが南部方言ではMädelnもありうる、日常語ではMädelsもありうるとされる。このことから、Mädelは本来的には南部方言であっても、現在ではより広範囲で日常的に用いられる語彙になっていると考えられる。『名探偵コナン』のドイツ語版においても、＜標準語＞を使用している江戸川コナンのセリフの中で“Mädels! Es reicht dann mal wieder, ja...?” (おいおい、その辺にしとけよおまえら…) のように、Mädelが用いられていることがある (Aoyama2003a: 23)。
 15. ドイツ語翻訳文の最後の単語einは、これまでの例とは異なり語頭のeiを省略した'nという表記になっていない。これは、この語が不定冠詞ではなく分離前綴りであり、「不定冠詞の語頭のeiの省略」という規則を当てはめる対象にはならないためであると考えられる。
 16. なお、3.2でも言及した通り、服部平次というキャラクターは内面的な特徴に関して伝統的な＜関西弁＞が与えるステレオタイプとは異なっている。金水 (2003: 99) によれば、近年の若者の間では「関西弁=かっこいい」の図式もできあがりつつあるとのことだが、それが言語共同体で広く定着するまでの過程において、服部平次が話す＜関西弁＞は (26b) に当てはまるキャラクター言語でもあるといえるだろう。
 17. 細川 (2011: 166-167) によれば、ドイツ語の＜黒人ことば＞は、「音声的な特徴」を用いた役割語で、標準ドイツ語から“r”の表記を省略したものである。この変種は、「コミックをドイツ語訳する際に人工方言として創造されたものが、「黒人らしい」言語変種と認識されてドイツ語の＜黒人ことば＞という役割語となり、ドイツ製コミックにおいても使用されるようになった」とみなせるという。

調査資料

- 青山剛昌 (1996a) 『名探偵コナン』10, 小学館。
 青山剛昌 (1996b) 『名探偵コナン』12, 小学館。
 青山剛昌 (1996c) 『名探偵コナン』13, 小学館。
 青山剛昌 (1998) 『名探偵コナン』19, 小学館。
 Aoyama, Goshō (2003a) *Detektiv Conan*. 10 (Trans. by Josef Shanel & Matthias Wissnet). Köln: Egmont.
 Aoyama, Goshō (2003b) *Detektiv Conan*. 12 (Trans. by Josef Shanel & Matthias Wissnet). Köln: Egmont.
 Aoyama, Goshō (2003c) *Detektiv Conan*. 13 (Trans. by Josef Shanel & Matthias Wissnet). Köln: Egmont.
 Aoyama, Goshō (2003d) *Detektiv Conan*. 19 (Trans. by Josef Shanel & Matthias Wissnet). Köln: Egmont.

参考文献

- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店。
 金水敏 [編] (2014) 『＜役割語＞小辞典』研究社。
 金水敏 (2015) 「役割語とキャラクター言語」金水敏 [編] 『役割語・キャラクター言語研究国際ワークショップ2015 報告論集』, 5-13頁。
 新倉真矢子 (2013) 『DVD&CDで学ぶドイツ語発音マスター』第三書房。
 バルトナー, イェンス (2004) 「ドイツにおけるマンガの行方」細川裕史 (訳) 『マンガ研究』5, 74-83頁。
 細川裕史 (2011) 「コミック翻訳を通じた役割語の創造—ドイツ語史研究の視点から—」金水敏 [編] 『役割語研究の展開』くろしお出版, 153-170頁。
 山本戸浩子 (2020) 「村上春樹作品における＜関西弁＞の英語翻訳について」『通訳翻訳研究への招待』22, 25-45頁。
 山中靖子 (2008) 「現代日本語の性差に関する研究: 文末表現を中心に」『東京女子大学言語文化研究』17, 87-100頁。
 Brembs, Gunhild (2004) *Dialektelelemente in deutscher und schwedischer Literatur und ihre Übersetzung: von Schelch zu eka, von ilsnedu zu bösartig*. Stockholm: Almqvist & Wiksell International.
 Geissberger, Eva Marisa (2016) “Die Übersetzung von Dialekten. Analyse und Übersetzung von José María Mendiluces Werk *Pura Vida*.” Barcelona: UAB. https://ddd.uab.cat/pub/tfg/2016/tfg_45408/TFG_2015-16_FTI_Geissberger.pdf. (2022年8月26日ダウンロード)
 Schreiber, Michael (1993) *Übersetzung und Bearbeitung: zur Differenzierung und Abgrenzung des Übersetzungsbegriffs*. Tübingen: Gunter Narr Verlag.
 Wöllstein, Angelika & Dudenredaktion (Hrsg.) (2016) *Die Grammatik: Unentbehrlich für richtiges Deutsch*. Bd. 4. 9., überarbeitete und aktualisierte Auflage. Berlin: Dudenverlag.

(大阪公立大学大学院文学研究科講師)

【2022年8月26日受付／2022年11月4日受理 『都市文化研究』編集委員会】

<Kansai Dialect> as a Role Language and its German Translation: Examples in *Detective Conan*

Moe Nobukuni

In Japan, characters speaking the Kansai dialect frequently appear in works of fiction, such as novels and manga. Such regional varieties (i.e. dialects) in creative works are a type of what Kinsui (2003) called 'role language'. This study examined how the Kansai dialect, used as a role language in the Japanese-language manga *Detective Conan*, was translated into German, and discussed how this translation method functions in the said work.

The current investigation revealed that the Kansai dialect in *Detective Conan* was not translated into a specific regional variety in the German version. Rather, the dialect was translated into an artificial dialect (*Kunstdialekt*) that did not belong to any regional variety. Its difference from the standard variety was marked mainly by incompletely pronounced syllables (indicated in the script).

In addition, this artificial dialect was used primarily to emphasise unique attributes of key characters rather than to indicate a specific regional setting. When non-key characters use the Kansai dialect in Japanese-language works, the purpose is to indicate that the story or particular scene takes place in the Kansai region. However, in the German version of *Detective Conan*, only the dialogue of the key characters speaking the Kansai dialect was translated into the above-mentioned artificial dialect. Many nameless characters used the Kansai dialect in an episode taking place in Osaka in the original Japanese version, but these characters used a standard variety in the German version. As such, this artificial dialect, which replaced the regional variety of Japanese in the German translation, did not serve as a role language that could denote a specific region or a type of character associated with that region. Rather, it served as a 'character language' (Kinsui 2015) that emphasised the unique attributes of key characters.

Keywords : German translation, Kansai dialect, Role language, Artificial dialect, Character language